

西脇順三郎

—超現実主義と産土—

知られているようで 知られていない詩人？

- 西脇の詩は一般には読まれていない？
- 日本人の詩的感受性にあるステレオタイプ。短歌、俳句の近代的伝統からつづく述志、写生、抒情などわかりやすい表現を好む。
- 島崎藤村、北原白秋、高村光太郎、中原中也など。

それでも、、、

- 西脇の詩を愛読してきた個人的理由。
 - 1) 世代的に西脇詩は灯台であった
 - 2) 西脇の詩想は日本をこえている
 - 3) 超現実主義や西欧文学への深い教養
 - 4) 西脇のディレッタントぶりや諧謔の知的おもしろさ

5) 日本の超現実主義（シュールレアリスム）は、

西脇の帰国から始まった。

「永遠のアヴァン・ギャルド」

（後に、エズラ・パウンドに推挙され

6) 現代詩の源流？^{ノベル賞候補}

20世紀の詩人

明治17年（1894）新潟県北魚沼郡

小千谷町（現在は市）生まれ

昭和57年（1982）小千谷市で死去

享年88歳

略年譜(1)

- 1912 慶應義塾大学理財科予科入学
- 1917 「ジャパン・タイムズ」紙に就職
- 1918 病氣療養
- 1920 同大学予科英語教員となる 野口米次郎、戸川秋骨、馬場孤蝶をしのる
- 1922 Oxford大学に留学 小説家コリアをしのる
T.S.エリオット『荒地』発表
- 1925 英語詩集『Spectrum(スペクトラム)』
ロンドン刊、仏語詩集『Une Montre
Sentimentale(感情的な時計)』未刊 帰国
- 1926 同大学文学部教授

略年譜(2)

- 1929 『超現実主義詩論』
(1927 『馥郁タル火夫ヨ』(日本最初の超現実主義の同人詩誌。佐藤朔編集))
- 1933 第1詩集『Ambarvalia』 39才
- 1942～45 沈黙する もっぱら武蔵野散歩
- 1947 詩集『旅人かへらず』
- 1952 詩集『近代の寓話』
- 1956 詩集『第三の神話』
- 1960 詩集『失われた時』 66才

略年譜(3)

- 1962 同大学退職 現代詩人会会長
詩集『豊穰の女神』『エテルニタス』
- 1967 詩集『禮記』 世界詩人会議参加
- 1969 詩集『壤歌』
- 1979 最後の詩集『人類』 85才
- 1982 『西脇順三郎全集』(全11巻 別巻1
筑摩書房)の刊行はじまる。
- 1985 小千谷市山本山に詩碑
- 1992 同大学SFCキャンパスに詩碑
- 1994 観音崎に詩碑

西脇は 戦間期「危機の20年」(E.H.カー)に ヨーロッパ滞在。

- 西欧で、ダダイズムなど、いわゆるモダニズムが噴出した時代
- ただし、西脇は西洋古典の教養ゆたか
- 19世紀のボードレールの熟読者であった

Surréalismeから超現実主義へ

- パリで起こったアンドレ・ブルトン、フィリップ・スーポー、ポール・エリュアール、ルイ・アラゴンなどによるシュルレアリスム運動は、ジャネやフロイトの影響と第一次世界大戦への批判からブルジョワ文化・文学に対する全否定から始まる。
- 英国滞在中、西脇は同時代の芸術運動に注目。モダニズム。イマジズム、意識の流れ。
- T.S.Eliotの『荒地、*The Waste Land*』など。また、シュルレアリスムやコクトーの作品などを熱心に読み、その詩法を取り入れる。
- 帰国後、「三田文学」誌上で批評活動開始。

『超現実主義詩論』(1929、36歳)より

- 「詩を論ずるは神を論ずるに等しく危険である。詩論はみんなドグマである」
- 「人間の存在の現実それ自身はつまらない。この根本的な偉大なつまらなさを感ずることが詩的動機である。詩とはこのつまらない現実を一種独特の興味(不思議な快感)をもって意識さす一つの方法である。俗にこれを芸術という」

『超現実主義詩論』の骨子

- 芸術のための芸術 (L'Art pour l'Art) = 美学
19世紀のゴッティエ「芸術至上主義」
- 詩作品を言語の修辞(メカニズム)として考える
- 近代的な芸術は「超自然」であること
- 手法として、相反するもの、イメージを衝突させること。

シュルレアリスムと『超現実主義』

- シュルレアリスム ≠ 西脇の超現実主義
- ブルトンたちの主張 = 人間解放 (倫理的主張)
⇒ 社会参加 (アンガージュマン)
- 他方、西脇の超現実主義 = 芸術の問題 (存在への問い)

編集者が『超現実主義』とする。

西脇は『超自然主義』としたかった。

西脇詩論の功績(1)

- ・日本で初めて、西欧の古典詩学(アリストテレス、ホラチウスなど)から、20世紀の超現実主義までを概観、咀嚼し、独自の超自然詩学(Surnaturalisme)を創造。
- ・詩作の方法を意識化した。ポーやボードレールの近代詩のあり方を継承、確立。
(比較、朔太郎の『詩の原理』など)

西脇詩論の功績(2)

- 詩作 (poiein=製作する)を修辞(組み合わせ)であることを意識した。これはロシア・フォルマリズムなどの言語論と似る。とりわけシクロフスキーの異化(オストラネニエ)作用。
- 詩の内容は「事物の新しい関係の発見」とした。最終的には存在と非存在をぶつけて「ゼロ」を暗示する美学。言語の脱意味化へ。
後に、詩=+×- = 0(無意味) = 永遠(寂しさ) = 美

萩原朔太郎の反論

「西脇順三郎氏の詩論」(1937)

- 西脇の詩学 → ディレッタント／ソフィストの詩論 → 「純粹修辞学」でしかない。
- 西脇に脱落しているもの＝「生活」「文学する精神の本質」
- 「論者自身だけの頭脳によって構成された一の非実在的な自己イリュージョンにすぎない」

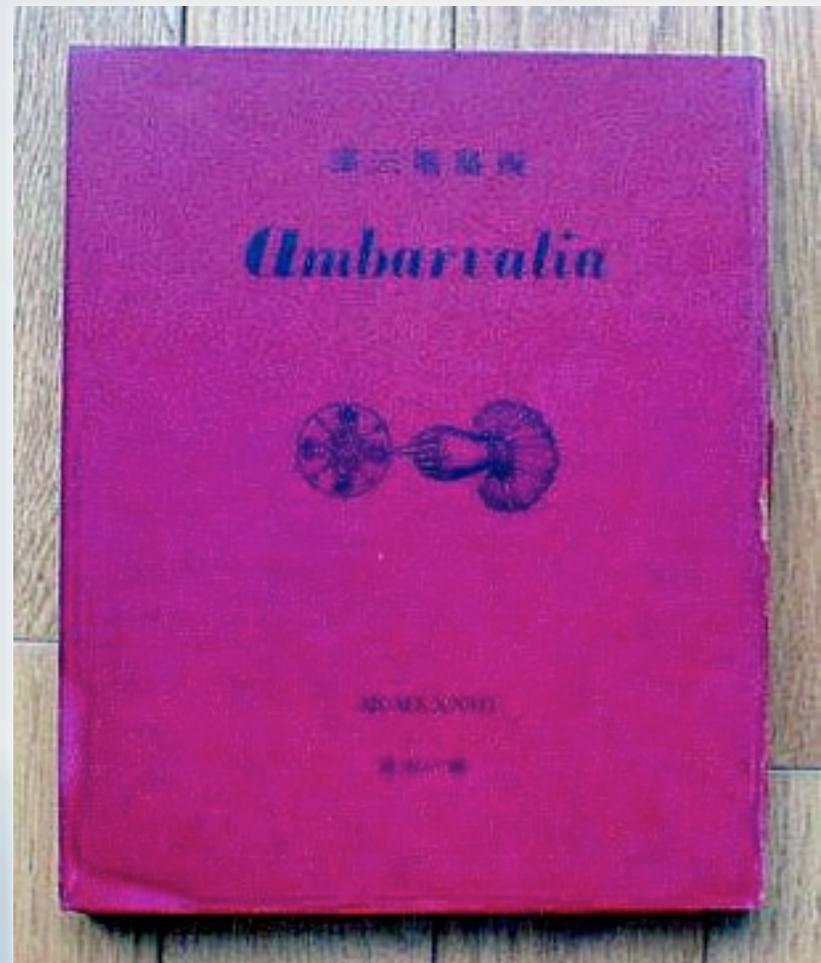
朔太郎の反論は？

- 朔太郎は西脇詩論を技術論として認める。しかし西脇の詩精神は受け入れない。
- 実際、西脇には受け入れられない詩的資質がある。ボードレールの倫理的資質、芭蕉の孤独など人生の悲劇的側面。
- 朔太郎の反論は西脇の半面を突いていて、そのかぎり正しい。
- ただし、朔太郎のいう「生活」とは何なのか？ 私小説的生活？

大岡信『超現実と抒情』 「超現実主義試論の展開」より

- 「シュルレアリスムの理念が、詩法とか修辞とかその他一切の〈文学〉を最も激しい侮蔑をもって報いるものであり、全存在的な行動原理であろうとする限り、日本において真にシュルレアリストたろうとした詩人は、瀧口氏ただ一人であったといっているのである」
- 「(西脇では)全存在的に受けとめられた行動原理ではなかった」

『*Ambarvalia*』(1933、40歳)
ラテンの詩人、ティブルス「収穫祭」より



『*Ambarvalia*』は2部構成 古代世界／近代世界

- 古代世界 (Le Monde ancien)。「ギリシヤ的抒情詩」より

天気

(覆された宝石)のやうな朝
何人か戸口にて誰かとささやく
それは神の生誕の日

(J.Keatsの本歌取り)

ギリシヤ的抒情詩(承前)

皿

黄色い堇が咲く頃の昔、
海豚は天にも海にも頭をもたげ、
尖った舟の花が飾られ
ディオニソスは夢みつつ航海する
模様のある皿の中で顔を洗って
宝石商人と一緒に地中海を渡った
その少年の名は忘れられた。
麗な忘却の朝。

地中海の明るさ

- 朔太郎は「皿」の詩を深く理解している。
- 古代地中海世界への憧憬。明るい笑いと新鮮さは日本の近代詩にはなかった。
- 宝石のイメージは西脇を終生魅了する。硬質で透明な色と輝き。
- 「とくにこの詩集は私の青二才の時の夢であったから、多分にロマンティックな夢であった」(復刻のさいの短文「近代人の憂鬱」より)

近代世界 (Le Monde moderne) モダニズムの洗礼

旅人

汝カンシャクもちの旅人よ
汝の糞は流れて、ヒベルニアの海
北海、アトランチス、地中海を汚した
汝は汝の村へ帰れ
郷里の崖を祝福せよ
その裸の土は汝の夜明けだ
あけびの実は汝の靈魂の如く
夏中ぶらさがってゐる

『Ambarvalia』の2つの新しさ

西欧文芸を背景とした

「記憶と現在；古今集」

- 1) 地中海的風土、日本近代詩にはなかったヘレニズム的な世界。日本の近代詩はむしろキリスト教的な色づけから始まった。感傷的涙っぽさがない。
- 2) 西欧20世紀のアヴァン・ギャルド、超現実主義的修辞は日本近代詩にはなかった。(象徴主義は入っていた)。

手法の新しさと多様性

- 相反するイメージ (image acoustique)
- 自動記述というより「意識の流れ」
- 本歌取り、引用、パロディの多用
- 諧謔としての詩、後の俳諧的要素
- 散文的な文体 (擬古典文体を嫌う) とそれを異化する (déformer) する連想

『旅人かへらず』 (1947、54歳)
戦時中の詩作・武蔵野逍遙

通奏低音としての「幻影の人」 『古代文学序説、結語』より 「孤独Einsamkeitの存在論」

- すべては変化して遂に破滅する。人生はすべて運命によってのみ決せられる悲劇である。
- 人生は放浪の旅である。人間は放浪者である。
- 人生の本質は闘争と苦しみである。人間は闘争のために生き、苦しみのために生きてゐるのである。
- 神は人間にこの闘争と苦しみを与へる。
- 人生それ自身は神に対する供犠である。

『旅人かへらず』の1

旅人は待てよ
このかすかな泉に
舌を濡らす前に
考へよ人生の旅人
汝もまた岩間からしみ出た
水霊にすぎない
この考へる水も永劫には流れない
永劫の或時にひからびる
ああかけすが鳴いてやかましい
時々この水の中から
花をかざした幻影の人が出る
永遠の生命を求めるのは夢
流れ去る生命のせせらぎに
思ひを捨て遂に
永劫の断崖より落ちて
消え失せんと望むはうつつ
さう言うはこの幻影の河童
村や町へ水から出て遊びに来る
浮雲の影に水草ののびる頃

以上の冒頭はとても美しい！

- 音感とイメージ、そしてこめられた思惟が調和して、流れるような深い詩的境地を見せる。傑作だと思う。
- 武蔵の散策というありふれた日常を描きつつ美しいエレジー（悲歌）となっている。

また、たとえば、、、

12 浮草に／花咲く晩／船をうかべて／眺る月の曇る ⇨ ほとんど
日本画ふうの美

61 九月の一日／心はさまよふ／タイフーンの吹い翌朝／ふらふら
と出てみた／一晩で秋が来た／夕方千歳村にたどり着く／枝も葉
も実も落ちた／或る古庭をめぐってみた／茶亭に客あり ⇨ 古典
的季節感

産土への回帰

時代背景＝軍国主義、ますらおぶり、超現実主義
への弾圧

詩集『旅人かへらず』の特徴

- たおやめぶり 自然界の中心は女
- 男は「蜂」で「恋風」
- 幻影の人／永劫の旅人＝認識
- 武蔵野の草木への関心
- 存在の淋しさ＝抒情性（認識よりくる）
- 文化／文明より田園によりそう牧歌

信濃川実景 早春



第三詩集『近代の寓話』

- この詩集は単に「こわれた生垣」とか「女の舌の甘さ」を集めたのではなく、一つの詩的見地から人間を慰めるために時々書いたものを集めたのである。詩の世界は通常の見地から見ると矛盾 (absurd) の世界である。しかしその矛盾は或る転換された世界から見ると矛盾でなくなる。

秋

タイフーンの吹いている朝
近所の店へ行って
あの黄色い外国製の鉛筆を買った
扇のように軽い鉛筆だ
あのやわらかい木
けずった木屑を燃やすと
バラモンのにおいがする
門はもう秋だ

道路

カメロットへ行く道は賑った
皆お祭りに行くのだ
ジンジャの花を愛する女のあの
眼に
すべての追憶は消えた
過去も未来も捨てられた
その黄色い馬車の中で初めて
心のよろこびがある
初めて死さえよろこびとなるのだ

『第三の神話』 (1956,62歳)

茶色の旅行

地平線に旅人の坊主が
ふんどしをほすしろたえの
のどかな日にも
無限な女を追うさびしさに
宿をたち出してみれば
いずこも秋の日の
夕暮は茶色だった。
丹波へ行く道は遠いが
ゴッホの幽霊が出る
麦畑を避けてふらふら歩くのだ(以下略)

軽妙なパロディと諧謔が手法として定着する。融通無礙の詩の境地にたっしているといえる。

絢爛たる意識の流れ

詩集『失われた時』 1960年刊 67歳

- 修辞＝絢爛たる連想、イメージの流れ
- 日本の詩史では類いまれな長篇詩
- この作品で朔太郎の反論は正しいか？ 朔太郎の「生活」という意味が狭くないか？ 非実在も生活の一部？

日本近・現代詩史上 における西脇の位置

- 明治新体詩の文語定型詩（形式の探求）
- 萩原朔太郎の『月に吠える』
- 口語自由詩（散文性／散文詩）
- モダニズム
- 超現実主義（西脇）
- 近代詩と現代詩をつなぐ（西脇）

西脇詩の魅力

- 近代詩にないスケールの大きさ。
- 東西の文物、風俗、文化に精通している
- 人間存在のあり方を深く見つめている
- 認識的な裏付けのある情緒の優雅さ
- 東洋の文人世界を思わせる
- 自然と永遠への回帰、歴史からの超越

西脇詩以降

- 西脇詩のさけた歴史性に巻き込まれたのが若い戦争体験者たちであった。
- 戦後の詩運動のなかで詩人の倫理性をすどく問うたのが「荒地」のグループ。その代表的な詩人は鮎川信夫。
- 超現実主義は、西脇の弟子の滝口修造によって引き継がれ、美術や詩の世界に大きな影響をあたえた。

西脇詩をこえて

- 西脇詩の到達した詩境は高い
- 西脇詩への批判はすでに朔太郎や吉本隆明からでていいる。「生活」がない。「紅旗征伐我事二非ズ(定家)」。歴史感覚がない。
- 日本ではまれな長篇詩を書いている。しかしやはり断片の集積というところがあって、大きな緊密な構成原理はみられない。
- 知識による発想が一読者を敬遠させる。

西脇順三郎—超現実主義と産土

終わり

ご清聴ありがとうございました。